



TITLE:

<大會抄録>サン＝ホセ信徒團反亂
の意味世界：フィリピン革命の思想
的源流をめぐる

AUTHOR(S):

池端, 雪浦

CITATION:

池端, 雪浦. <大會抄録>サン＝ホセ信徒團反亂の意味世界：フィリピン
革命の思想的源流をめぐる. 東洋史研究 1980, 39(3): 606-607

ISSUE DATE:

1980-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153788>

RIGHT:

事類備要』類姓門には、この事情を補う恰好の記載があり、複姓十四を含む四二五の諸姓の五音配分が新たに判明する。

右の資料を参考としながら、姓氏制の展開過程における「吹律定姓」の歴史的位置づけを試みるのが本報告である。なお、小川環樹「反切の起原と四聲および五音」(『中國語學研究』、創文社、一九七七年、所收)、梅原郁譯注『夢溪筆談』2(平凡社、東洋文庫、一九七九年)、参照。

秦の葬制について

——秦漢帝國の一斑——

杉 本 憲 司

最近の考古學調査により、いままで不充分であった春秋・戰國時代の各國の様子が一部明らかに、文獻の缺をおぎなっている。その中であつて秦についても同様に新しい資料が提供されている。地域的には西周王朝の故地である、陝西省渭水流域に中心をもつ秦國が、その後、東方諸國との間に政治・文化の面で大きなちがいを持つてくるその社會について早くから指摘があり、秦漢帝國成立の問題として論ぜられてゐる。

今回の發表は、秦の葬制に視點をすえて、秦國の歴史的な位置づけを考察していきたい。先づ第一の問題は帝陵墓の成立である。墓室の上に大きな版築封土と建物をもつ中山國王陵の調査により、大墳丘をもつ始皇帝陵成立についての系譜の糸口がつかめてきた。第

二は、春秋時代と戰國時代で葬制に變化が生れてくるが、その背景にある問題をどう考えていくかである。第三は、戰國時代末期にみられる小型墓群の成立をどのように考えていくかの問題である。

以上の三點を中心に考察して問題の所在を明らかにするとともに、新『七國考』の第一歩としたい。

『元朝秘史』十五卷本鈔本について

原 山 煌

現在通行している『元朝秘史』には二種の系統がある。洪武年間(1368-1398)に編纂された十二卷本と、のち『永樂大典』に收録された『秘史』からの傳本たる十五卷本である。そして翻譯をはじめとする『秘史』研究の経緯から、今日では十二卷本が専ら研究の對象となつてゐる。有名な『四部叢刊』本や『葉德輝』本は共に十二卷本の鈔本に基づくものである。一九六二年、蘇聯邦科學院から同國に傳わる十五卷本鈔本の影印が刊行されたが、それを従來の諸傳本と校合すると、脱落した節があること、その他の誤りも散見されること等からさほど重視されず、結果として「十五卷本」全體もそれに應じた評價を受けてゐるように思われる。しかし該十五卷本には、他のテキストの誤寫を正しうる孤立的な特徴も少なくないことも判明した。

『秘史』の如く鈔本として傳つた文獻については、各テキスト間相互の嚴密な校合が必要である。特に『秘史』は、モンゴル語を漢字轉寫したという特異な性格を持つので、益々緻密な検討が望ま

れる。十五巻本は、このような必須の作業からとり残されてきた。そのことは、本邦に傳わる十五巻本が完全に看過されている實情からも窺える。清朝の大藏書家陸心源が「十萬卷樓」藏本中に架藏していた一本がそれである。明治末年將來され今は靜嘉堂文庫に收められるこの本は惜しくも卷首を缺くが、見るべきところが多い。『祕史』諸本中に於ける位置づけを試みる所以である。

サン・ホセ信徒團反亂の意味世界

——フィリピン革命の思想的源流をめぐる一考察——

池 端 雪 浦

サン・ホセ信徒團と呼ばれるカトリック教徒の同胞團體が、ルソン島タヤバス地方で大規模な反亂を展開したのは、一八四一年十月のことだった。サン・ホセ信徒團は一八三二年頃マニラで設立され、一八四〇年頃、南タガログ三州に急速な勢いで浸透した、教會未公認の同胞團體であったが、その信仰内容は、きわめて正統的なものだった。しかし、スペイン當局は四十一年半ば、信徒團の組織規定がスペイン人とメステイソを除外していることを理由に、これを異端的であるとして解體命令を發し、同年十月下旬、實力による彈壓を開始した。そこで信徒團員は大舉してタヤバス州イサパンの野營地に結集し、果敢な武力抵抗をくり擴げた。

平穩な信仰活動を行っていた信徒團が、一夜にして武力抵抗集團に變じ、最後の「一兵にいたるまで徹底抗戦をくり擴げたその戦闘

力はどこから生じたのか。絶望的なまでの貧困、あるいは植民權力の抑壓體制といった外在的な説明は、この場合、客觀的に説得力をもたない。ここで重要なことは、信徒團が追求していた救済思想の内容を明らかにすることである。言いかえれば、反亂者たちが各々の心に思い描いていた反亂の意味世界を理解することである。本日の報告では、その點に關する一つの試論を提出したい。そして、ここで明らかにする反亂の意味世界が、實は、半世紀後に展開されるフィリピン革命において、西歐的變革思想と正統性を競い合う、土着的變革思想の源流でもあることを併せて指摘したい。

トルコ革命のひとこま

——エフ・エ・セイベキたちのこと——

永 田 雄 三

第一次世界大戰後、連合國によるトルコ分割の危機に直面して、トルコ人がこれに對する祖國解放運動を展開してこれに勝利し、またその結果、みずからオスマン帝國を滅亡させてトルコ共和國を樹立したことは、トルコ革命としてよく知られている。

トルコ革命の初期の段階において、ムスタファ・ケマルによる解放戦線の統一がまだ實現されないころ、イスタンブル市民や、西アナトリア、南東アナトリア方面の民衆はすでに、連合諸國軍に對して、ゲリラ的な仕方ですでに武力闘争に入っていた。これらの運動はバルチザン運動としてわが國にもすでに紹介されている。